

連載 “Well-being” ことはじめ

第7回 “Guanxi：幸福は個人的な努力だけの問題ではない”

臨床心理士・カウンセラー 三村 和子

前回に引き続き、レオ・ボルマンズ氏によってまとめられた「世界の学者が語る『幸福』」に示された格言を用いて、目の前の具体的な問題を、基礎情報学をもとに検討していきたい。今回のメッセージを読んでみよう。

「中国における人間関係（グアンシー）：幸福は個人的な努力だけの問題ではない」

このメッセージを記したのは、インイ・ホン氏（中国）で、シンガポールの南洋理工大学とイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の心理学部に勤務している。ホン氏の著書に、“Social Psychology of Culture” (Psychology Press, 2006) がある。ホン氏は、中国文化における二面性、とりわけ中国文化における人間関係を表す「Guanxi (グアンシー)」の重要性を指摘する。「多くの中国人にとって、社会的な義務を果たすことは、個人の権利を主張するよりも、優先されることが多い。」そして、ホン氏は、西洋社会と対比して、中国社会における幸福を次のように表現する。「西洋社会で見られる個人的なタイプの幸福は、興奮、喜びと関係するが、その他の国々で見られる社会的なタイプの幸福は、安心感や平穩、調和した気持ちと関係がある。」

更に、ホン氏は、「そうはいつでも中国社会は一枚岩でできた存在ではない」ことも指摘し、次のように述べる。「国民は人種と宗教において多様であり、外国文化と高度経済発展に影響を受けている。現代中国においては、中国人は市場経済から生じる需要に直面し、社会的地位を高めるために他者と競争する必要性に向き合う一方で、昔と変わらず、心身ともに援助を求めて社会的な関係を頼みにしている（下線は三村による）。」「他者と競争する」ことと「社会的な関係」の二面性が、Guanxi という人間関係を形成させるという。

Guanxi の関わりを通じて、「個人的な利益を手に入れる一方で、同時に社会的義務に制約され、それを守っている。こうした複雑な社会的マトリックスにおいてうまく世渡りをするのが、現代中国では幸福の必須条件である」という。また、「さまざまな哲学や宗教的信条が共産主義的な思想の支配に立ち向かっている」ことが、中国社会をより複雑にしていること、そしてこの影響を受けて「幸福を得るために共産党が規定している義務を果たすことだけが幸福にいたる道だと考える人々は以前よりも少なくなっているようだ」と語る。

今回のホン氏からのキーメッセージは、以下である。

- ・幸福は個人的な努力だけの問題ではない。
- ・幸福は社会的な義務や責任を果たすことにも関係している。
- ・幸福感は興奮や喜びという形だけではなく、平穏や安らぎという形でも表現される。

今回のメッセージを、中国社会で働く IS^{*1}技術者にとってどのような意味があるのかを基礎情報学による分析を用いて検討したい。中国社会は並列な社会システム (HACS^{*2}) 群から成り立っている。中国社会で働く IS 技術者は、経済システムにおいては成果メディア^{*3}は貨幣であり、個人的な努力により、個人的な利益が得られるかどうか連辞的メディアである。「家族友人 (この場合は親族が主?) システム」においては、成果メディアは愛であり、愛される、つまり、大切な存在であると思われるかどうか連辞的メディアであろう。そして、経済システムと家族友人システムという2つの社会システムは、心的システム^{*4}から見た場合に上位に位置する。この2つの社会システムは、上位の共産党システムによる拘束を受けていると想定される。共産党システムにおいては、成果メディアは忠誠であり、忠誠であると認められてこそ、お金では手に入れることが難しい平穏や安らぎがもたらされると考えられる。ホン氏が「複雑な社会的マトリックスにおいてうまく世渡りをする」こととは、この並列な2つの社会システムを機能的に分けて、日常的なコミュニケーションの意味作用について冷静に判断し、行動することである。

中国社会におけるマスメディアの作動は、社会的コミュニケーションにとって重要であると考えられるが、流動的で捉えがたいものである。マスメディアが共産党最前線であるという前提であれば、マスメディア・システムは共産党システムの下位に位置づけられる。そして、マスメディアがグローバルに通用するという前提であれば、マスメディア・システムが共産党システムの上位に位置づけられ、複数の社会システムに拘束を与えると考えられる。なお、マスメディアの成果メディアについて「まだ定論はない。」と葛星氏は述べている。

先月号メルマガの芳賀正憲さん執筆「連載 情報システムの本質に迫る (芳賀正憲)」において、同志社大学の中田喜文教授による連載 (日本経済新聞・経済教室)「ソフトウェアの価値創造と日本」について紹介され、重要な問題提起がなされた。同連載の記事No.7 (2017年10月12日)によると、中国のソフトウェアエンジニア (SE) 人材の豊富さや能力向上心の高さなどについて言及されている。例えば、自己啓発学習時間の比較では、中国では SE は 30%が週 10 時間以上であるのに対し、日本では 2%にすぎないこと、逆に自己啓発を全く行わない SE は、中国では 1%だけであるのに対し、日本では 28%もあるという大変嘆かわしい結果が示されている。中田教授は「中国企業のソフトウェアそして SE の戦略的活用は今や米国企業をも脅かし始めています。それを可能とするのは若くて向上心に溢 (あふ) れた SE です。そのような SE に活躍の場を提供している中国企業

と、現状変更意欲に乏しいSEが働く日本企業では、企業のダイナミズムに大きな差が生まれるのは当然です。」と締めくくる。

日本の多くのIS技術者の心的システムが、自律的に「やりがい感を持つことができる」ためには、経済システム（個人的に利益が得られるかどうか）、家族友人システム（愛が得られるかどうか）、そして、IS産業システム（産業界における成功ポジションを確保する）、組織システム（専門職としての質の高さを追求できる場が提供される、例えば技術的な知見や経験を得ることができる）など、複数の社会システム群のコミュニケーション（出来事）の創発が喫緊の課題であろう。

IS技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<注釈>

*1) ISとは:

Information Systemsを指し、技術中心ではなく、人間中心の情報システムを想定し、あえてIT、ICTではなく、ISとしている。

*2) HACSとは:

Hierarchical Autonomous Communication Systemの略。「階層的自律コミュニケーション・システム」基礎情報学の主要な概念であり、情報の意味伝達モデルである。人の心的システムの上位概念に社会システムがあり、さらにその上にマス・メディアがあるとして階層的に位置づける点が特徴である。

*3) 成果メディア、範列的メディアとは:

成果メディアは、連辞的メディアと範列的メディアに分類される。連辞的メディアは、コミュニケーションの時間的・継起的なつながりに関わり、範列的メディアはコミュニケーションの空間的・概念的なつながりに関わる。範列的メディアは安定した意味ベースに関連づけ、概念上の選択肢を用意することにより、「情報の意味伝達」という擬制が達成される。

*4) 心的システムとは:

「思考」を構成素とするオートポイエティック・システムである。心的システムは常に脳神経システムと相互作用し、「原一情報」（＝生命情報）を素材とした思考が算出され、記述行為によって社会情報が形成され、人間社会で通用する意味内容を含んだ情報が現れるとされる。

<参考文献>

- ・レオ ボルマンズ編[猪口孝 監訳] (2016) 世界の学者が語る「幸福」 西村書店
- ・西垣通 (2004) 基礎情報学：生命から社会へ NTT出版
- ・西垣通 (2008) 続 基礎情報学：「生命的組織」のために NTT出版

- ・西垣通（2012）基礎情報学入門：生命と機械をつなぐ知 高陵社書店
- ・葛 星 “中国マスメディア・システムにおける宣伝プログラム：その構造と機能をめぐる考察” 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 No85 20131010 pp. 117-130